

日本の予防接種制度の現状と課題、そして未来
司会のことば

¹新潟大学大学院 医歯学総合研究科 小児科学分野、²富士重工総合太田病院

齋藤 昭彦¹、佐藤 吉壮²

日本の予防接種制度は、“ワクチンギャップ”という言葉で代表されるように、海外のそれと比べ大きく遅れていることは以前から指摘されてきた。しかし、2008年にヒブワクチン、2009年にヒトパピローマウイルスワクチン、2010年に小児用肺炎球菌ワクチン、2011年にロタウイルスワクチンが導入され、日本にもようやく海外の子どもたちに接種されているワクチンが使えるようになってきた。また、前述した3つのワクチンに関しては、国の臨時予算の公費助成によって、ほとんどの地域で費用負担なしで接種できるようになった。このように新しいワクチンが導入され、接種が進む一方で、まだまだ置き去りにされている様々な問題がある。例えば、予防接種のほとんどが筋肉内注射ではなく、皮下接種されていること、被接種者、接種者にある根強い同時接種の安全性に対する疑念、異なる不活化ワクチンに決められた接種間隔、地方自治体ごとの単位で予防接種が実施されることによる地域の格差、混合ワクチン導入の遅れ、予防接種に関する教育制度の不整備、そして、予防接種制度を国策として考える予防接種政策の諮問機関の欠如などがあげられる。このシンポジウムでは、これらの課題について議論すると同時に、未来の新しいワクチンに関する技術についても議論し、今後の日本の予防接種の未来について考えたい。